

# 不実の月

三鷹 奇異高

## 不実の月

---

雪見障子から縁側の向こうに見える庭の池におぼろに映る水面の月。

秋風で枯葉が舞い、落下した一葉に水面が揺れると掻き消されそうにその薄い金糸雀色のこう彩が波立つ。

まるで今の俺の気持ちそのままに。

シェークスピアの戯曲にもあるように、潮の満ちかけでその姿を変える不実の月。

そうと分っていて、尚も欲する気持ちはあの水面のように僅かな概容で揺らいでしまう。

「いい加減……見切りをつけないと」

独り言のように呟く。

隣で寝息を立てているこの男は、けっしてこの手には入らない。

こうして何度も肌を重ねてもそれは互いの欲望の捌け口でしかない。

分っていてそれを振り切る勇気もなかった。

この想いが捨て切れずに今日までできてしまった。

大学を卒業してあれから何年になるだろう。

俺は奴と出会ったあの頃を回顧した。

今年の桜は例年より開花が早く、入学式のときには既に散り始めていた。

長い式典の後、門までの道のりを各クラブや同好会の勧誘で賑やかな中、この男・鍋島(なべしま)敦夫(あつお)を見かけた。

だが最初に目に止まったのは、彼ではなく隣で一緒に歩いていた片割れの嶋田(しまだ)卓郎(たくろう)の方だった。

すらっとした長身の上にどこかモデル並に甘いマスクは黙って立っていてもかなり目立った。

実際、嶋田は全学年から男女の区別も問わずの注目度だった。

逆に地味な顔で頭一つ低くめの鍋島はどう見ても引き立て役にしか見えない。

後で二人とも同じ文学部だと分って驚いた。

親しくなったのは講義の席が隣になり、ノートを貸したのがきっかけだった。

奴は近くで見てもそれぞれのパーツのバランスはいいのだが凡庸に出来ていた。

だが話してみるとその印象は一変した。

頭の回転が恐ろしく速く、行動力も半端なかった。

そして非凡な才能はある種カリスマ性の如く、周りの者達を魅了していった。おまけに人を信服させる力もあるものだから人望も厚かった。

だその行動力や人脈を、惜しみなくフルに発揮させるのは全て一人の男に限ってだ。

あの入学式の日に連れだって歩いていた長身でイケメンの嶋田だ。

オムツの時から幼馴染で腐れ縁だと言っていた。

只の幼馴染だと断言しているくせに、いつも奴の視線の先には何故か嶋田の姿があった。

時折見せる切ない顔に何故か俺は心を奪われた。

その感情がなんなのか分らないまま・奴の姿を追っていた。

やがてその切ない顔を自分に向けてくれたらいいのにと・思うようになった。

その頃には既に男同士だというのに、鍋島に対する気持ちが友情以上のものだと感じ初めていた。

それまで俺は勿論、ゲイでもバイでもなかった。

奴以外の男には決して邪な気持ちなど持ったことはないと言言できる。

しかし今は男の鍋島に片恋している。

そんな俺の思いとは違い鍋島のそれはプラトニックで、嶋田がこの世で一番なにより大切な存在なのだ。そしてその想いは崇高なまでに奴の中で根付いていた。俺を含めて数多の肉体関係までなした者達でさえ、これには足元にも及ばない。腐れ縁だと悪態をつくその言葉の中に奴の密かな想いを知った。そうとは知らずこの男の溢れる英知と燦し銀のような男気に惹かれ、我が物にしたいと切望して止まなかった。

そして果敢にも挑んでは打ち破れ、去っていったのだ。しかし滑稽なことにこの男自体、片思いなのだ。なぜなら嶋田には既に有村豊という恋人がいるからだ。あの日の事を俺は今でも忘れない。嶋田から有村の事を聞かされた時、冷静沈着な男は見つとも無いくらい動揺した。そしてこの世の終わりの如く意気消沈した奴の姿に、千載一遇のチャンスだと思った。だがそういった隙を見せておきながら、奴は結局誰にもその立ち位置を与えなかった。性質の悪い事この上ない。だから俺が今のこのポジションを諦めれば、明日にはもう別の誰かが取って変わっているだけの事だ。奴にとって天辺に位置する嶋田以外、二番目に誰がこようとどうでもいい事なんだ。そう断言できるのは大学時代に既に体験済みだからだ。男女関係なく来る者拒まずの奴と深い関係になって二年目。いつまでも二の次扱いに業を煮やした俺は愚かにも奴と距離を置くことにした。まるで女のような女々しい行為だと自負したが、その時はそうする事で自分の存在価値を示したかった。だが一ヶ月もせずにその二番目の座は別の女のものになっていた。キャンバスでも才色兼備で有名な女性だった。一つ先輩になる彼女は難なく俺の二番目の座に居座った。俺のプライドは粉々に砕け散った。一人相撲でしかない失恋の痛手から、結局友達としての関係も未練がましいとあっさり手放した。そしてこれも運命と諦めかけた頃、奴から召集がかかった。映研のサークルを発足させるのを手伝えというのだ。それも嶋田の為に……。勿論そんな馬鹿らしい事誰が引き受けるものかときっぱり断った。すると奴はあっさり、

「わかった他をあたるよ」といとも簡単に諦めを口にしたのだ。俺は奴の非凡な才能にも惚れこんでいたので、他の奴にそのポジションを取られる事に異常な嫉妬を覚えた。それもうかうかしていたらあっという間に埋まるポジションだ。俺は一旦断ったその口で取って返してすぐに引き受けてしまった。後で後悔の二文字が重く押し掛かってきたのは言うまでもない。それからは済し崩しのまま付かず離れずの関係が続いた。やがてお互いに大学を無事卒業して、俺は広告代理店。奴はその才能を開花させて売れっ子の放送作家、脚本家だ。

卒業前には例の才媛の彼女とは別離していて、いつの間にか俺との関係が復活していた。そして相変わらず俺の立ち位置は微妙だ。一週間に一度くらいのペースで世田谷のこの家を訪れるのだが、時々この寝室に知らない女が裸で寝ているのに出くわす事がある。

誰だと聞けば、ディレクターに連れられた何軒目かの店から多分お持ち帰りしたんだろうと不実な事を平然と口にするのだ。

隣で呑気に寝息を立てているこのどうしようもない男が心底憎くなる事がある。

だがこのアホ面ともおさらばだ。

来月から俺は大阪に転勤だ。

新幹線で二時間という距離が果たして遠いのかというと疑問の余地はあるが、都内よりは由としよう。

転属願いは随分前から何度も提出していた。この地を離ればこいつの呪縛から逃れられるような気がした。

裏を返せば、そうまでしないと別れられないからだ。

だが転勤希望は中々叶わず、毎年徒労に終わっていたのだが、先月常務から呼ばれて転勤が確定した。

向こうでの転居先のマンションも手配済みだ。

今月最後の週末には引っ越す。

これで見納めだと思えば感慨一入だ。

そう思いながら改めて奴の寝顔を眺めた。

太い眉毛に薄情な薄い唇。どこか愛嬌のある垂れ目は見せ掛けだ。

「やっぱ……嶋田の方が絶対いい男だよな」

容姿端麗は勿論、心根がなんと言っても有村一筋というからある意味羨ましい。

この前なんか仲の良い二人が珍しく揉めて、嶋田はシアトルまで有村を追っかけて連れ戻したのだ。

どうせ男を好きになるなら、なんで嶋田のようなのにしなかったのかと何度も思った。

こんな不実な権化の塊のような奴とは雲泥の差だ。

敦夫……大学から今までありがとう。

お前のお蔭で楽しいキャンパスライフだったよ。

俺、大阪いったら今度こそ両想いになれる相手見つけるよ。

お前よりってのは難しいだろうけど……。

俺の事、一番に思ってくれる人を見つかるよ。

敦夫、元気でな。

俺は寝ている奴の唇にそっと触れるだけのキスを落とした。